第３２７回　令和８年１１月１１日（水）

「日本人の勤勉性」

海外から来る旅行客が日本の電車が定刻通りに発着することに驚くのは有名な話です。企業でも時間に遅れることは社会人としてもっともいけないことであると言われますし、エントリーのメ切は非常に厳格で、１日でも遅れたら受け付けてもらえないイベントはたくさんあります。

日本人の勤勉性はいつごろから身に付いたのでしょうか。明治維新まで日本は太陰暦で暮らしており、亥の刻、子の刻といった太陽を使用した時刻表示はあったものの、主な時間の目安は日単位でした。１年の中で「今日は何の日」ということが基本です。

その名残で元旦であったり、節分であったり、お盆であったり、日本の年中行事は日が基準で時間が設定されているものはあまりありません。豆まきは何時ごろしなければいけないとは聞いたことがないですよね。

ただ明治以前に時間にルーズだったかというと、農民はそうではなかったようです。村の共同作業が多かったので、田植えや稲刈りなど、時間を決めて行っていました。ただし刻限ではなく太陽の位置が中心で、日の長い夏や日の短い冬では活動時間が異なりました。

電気もない時代ですから日没で寝つき、日の出で起きることになります。人間と自然の関係がいまより濃密だったことがわかります。

職人は農民と違い、仕事の自由度は高かったようです。熟練の職人は人気があり、どの職場でも重宝がられました。一方で時間や金銭感覚は割とルーズで、お酒や賭けに報酬を使ってしまう職人も多かったようです。

明治を過ぎて工場が次々に建つようになると、西欧の時間を中心に長時間で働くようになります。１日 14 時間、月２日お休みという過酷な工場もあったようです。特に製糸業を中心とした女工さんの働き方は健康を犠牲にした悲惨なものが多かったようです。

日本人の勤勉さと時間が結びついたのが明治期以降です。それからは上下関係が厳しい日本は時間厳守が絶対的なルールになりました。

現在は休むべき時間にもスマホなどで常時脳が働かされています。精神的な患者が増えるのも無理ないような気がします。もう一度自然と人間の距離感を縮めて、太陽とともに生活するリズムを取り戻すべきではないかと思います。時間があれば１週間くらいスマホと時計を忘れて田舎でゆっくりするのもよいかもしれません。